コンゴ国連軍と反ルムンバ秘密工作　一九六〇年七月～九月
――クーデターを支えた国連平和維持活動――

三須　拓也

目次

はじめに
一　背景　アメリカとコンゴ国連軍
二　カタンガ分離の「国内問題」化と国連軍の駐留
三　クーデターを支えたコンゴ国連軍
おわりに

はじめに

世界で頻発する紛争への対処に国際連合の平和維持活動が積極的に利用されている。国連憲章上に規定を持たない平和維持活動が国連の実践過程から編み出されて以来、過去五十四を数える平和維持部隊や軍事監視団が世界中

に展開され、そして冷戦終結後の十年の間だけでも四十一もの活動が行われた（二〇〇〇年七月現在）[1]。効率性の問題など当該活動に対する批判は様々な形であるものの、それらが数々の紛争終結に貢献してきたことは歴史的事実として認められよう[2]。ここ数年では、国連平和維持活動にさらなる期待を抱き、活動規模の拡大やその数的な増大のみならず、活動内容の質的な変化を提言する者も少なくないようである。それは、第六代国連事務総長ブトロス・ガリ（Boutros Boutros Ghali）が唱えたように、「予防外交」を旗印にして、武力紛争勃発の可能性があるような地域において、「積極的かつ未然に」紛争を防止することを同活動に期待する声である[3]。最初の十三の国連平和維持活動が行われるまでに四十三年かかったのに対し、次の十三の活動ではわずか四十三ヶ月しかかかっていないという事実に鑑みても、当該活動に対するこのような期待はとどまるところを知らないかのようである。

このような国連平和維持活動への期待には、広く流布している公正・中立イメージが関係していると指摘できるだろう。すなわち、同活動は、紛争当事者の合意を前提とした中立的存在であり、ゆえに紛争解決の仲介として適切であるというイメージである。同活動へのこのようなイメージは、数々の国連職員達の地道な活動の上に築かれてきた信用・信頼の反映に他ならないだろう。

このイメージを作り上げる上で重要な役割を果たした人物の一人として、第二代国連事務総長ダグ・ハマーショルド（Dag Hammarskjöld）を挙げることができる。国連平和維持活動の「生みの親」とでも言うべき存在である彼は、中立性原則を含む国連平和維持活動の中心的行動準則を公けにし、同活動の理論的基礎を提供した[4]。彼自身も、公正・中立の立場を公言し、在任中、様々な国際政治問題の解決にあたった。彼のこのような態度は、一九六一年にノーベル平和賞を受賞するなどの形で多くの人々の賞賛を受け、彼の死後にはその功績を称える数多くの伝記が記された。ハマーショルドは「真に国際的な国際公務員」であり、「言葉の上だけでなく、行為においても、全て

の国家圧力や影響力から自由な存在であった」と、ザッハー（M. W. Zacher）が記したように、彼は国連の中立性を具現する存在として描かれてきた[5]。

しかし国連平和維持活動の歴史を振り返ると、ハマーショルドや彼が指揮した国連平和維持活動の政治的中立性に疑問を抱かざるを得ない事例に行き当たる。コンゴ危機の事例である[6]。本稿では国連の公式定義に倣い、中立性原則とは「平和維持活動は受け入れ国の内政に干渉してはならず、加盟国に影響を与える国内紛争の一方の当事者に有利になるように行われてはならない」こととするが[7]、コンゴ危機の事例では、このような定義からはほど遠い国連平和維持活動像が浮かび上がってくる。危機が展開した一九六〇年から六三年の間に、コンゴ国内でのクーデターへの荷担、初代首相パトリス・ルムンバ（Patrice Lumumba）の暗殺への間接的関与、新内閣設立にあたっての政治工作、そしてカタンガ分離終結への武力行使など、コンゴの国連平和維持活動が中立的立場を明らかに踏み外していた可能性を見いだし得るのである。

このような中立性についての疑念に対して、中立からの逸脱であったとしても、それはあくまでも活動の結果であり、ハマーショルドとしては、国連平和維持活動を派遣先における政治闘争から隔離し、中立たらんと意図してきた、という主張はあり得るだろう。歴代国連事務総長の軍事顧問を務め、国連平和維持活動についての多くの著作を記しているインダル・ジット・リクーエ（Indar Jit Rikhye）は、国連事務総長がコンゴのケースにおいて慎重に中立性を保とうとしていたと主張している[8]。

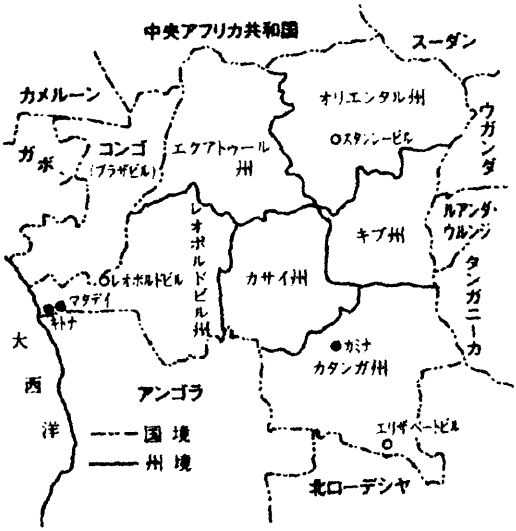
しかし、近年公開された各国政府公文書に残された事実は、国連事務総長のそのような意図に明確な疑念を抱かせるのである。九〇年代に入ってから、公文書公開に呼応して、コンゴの国連平和維持活動の中立性を検討する少なからざる数の論文が公表されている[9]。ごく最近では、パトリス・ルムンバの暗殺事件についての研究書を著した

リュド・ドウィット（Lude De Witte）が、「国連は自ら望んで西側諸国による（コンゴへの）干渉の道具であろうとしていた」〔括弧内は筆者。以下同様。〕との主張を展開している。[10] このような主張は、公正・中立のハマーショルド像、国連平和維持活動像を主張する人々との間で、大きな論争を惹起した。例えば、『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』誌の二〇〇一年一〇月四日号には、ドウィットへの反論が、ハマーショルドの側近として、また長年にわたって平和維持活動の現場を指揮した経験を持つ元国連事務次長ブライアン・アークハート（Brian Urquhart）によって掲載され、同誌一二月二〇日号には、ドウィットからの返答、さらには、コーリン・レーガム（Colin Legum）からの意見表明、アークハートからの再反論がなされたのである。[11]

真実はどこにあるのであろうか。国連は平和の使者・紛争の調停者であるというイメージは、歴史的検証に耐えられるのであろうか。本稿は、近年公開された各国公文書に依拠し、コンゴの事例において、実際に国連平和維持部隊が採った措置および、そこで国連事務総長が果たした役割、そして彼を取り巻く国連上級職員達の意図についての歴史的検証を行い、国連平和維持活動の中立性を問い直すものである。[12] ここ数年、コンゴ危機をめぐる資料公開はめざましく、本稿は、アメリカ、イギリス、ベルギーにおけるそれら新資料の渉猟に基づいている。本稿は、危機の開始後の約三ヶ月間を分析の期間として設定する。結論を先取りするならば、本稿での考察を通じて、国連が独裁を生み出すクーデターに荷担したという驚くべき事実が明らかとなる。

一　背景　アメリカとコンゴ国連軍

国連平和維持活動の歴史の中で、コンゴ国連軍活動（Organisation des Nations Unies au Congo：ＯＮＵＣ）は、アフリカにおいて最も困難を極めた脱植民地化過程で誕生した。一九六〇年六月、コンゴは旧宗主国ベルギーから独立を果たした。しかし、その前途は決して明るいものではなかった。国内には様々な部族対立が存在し、ガーナやギニアといった他のアフリカ諸国で見られたような統一国家を構想する民族主義は十分に成熟していなかった。また、国土を横断するような交通、通信網といった社会資本も不充分で、独立後の国家運営、経済運営を担う人材にもこと欠いていた。



香西茂『国連の平和維持活動』
有斐閣、1991年、98頁より転載

このように、コンゴが国家運営に支障を来すような状態で独立を果たさざるを得なかった背景には、早急に独立を決定したベルギー政府の意図があったと言われる。一九五九年の植民地独立を求めるレオポルドビル暴動をうけて、一九六〇年一月、ベルギー政府はコンゴの独立を決定した。そして、その後わずか六ヶ月の間にベルギー政府はコンゴの新憲法である基本法（La Loi Fondamentale）を制定し、コンゴ人への権力

の移行を実行したのである。ベルギー政府は、独立後もコンゴの支配を継続したいと考えていた。それゆえ、あえて早期の独立承認を与え、コンゴ側から協調姿勢を引き出そうとしたのである。ドウィットは次のように評している。

「制御不能な反植民地運動に直面して、ベルギー政府、王室、植民地企業は、コンゴ人民が急進化することを避け、また民族主義指導者の権威が高まることに歯止めをかけようとして脱植民地化を加速させていった。そして、いったん政治権力が経験不足のコンゴ人政治家の手に渡ったときから、彼らを背後からコントロールできると目論んでいた。[13]」

同年五月、コンゴで歴史上初めての国政選挙が行われた。この選挙の結果はベルギーの目論見を裏切るものであった。なぜなら、この選挙でベルギーとの対決姿勢を打ち出している民族主義者パトリス・ルムンバが率いるコンゴ民族運動（Mouvement National Congolais）党が勝利を収めたからである。この選挙は、際だった選挙妨害もなく民主的手続きに則ったものであったが、選挙後にベルギー政府は、「ルムンバをいかなる重要なポストにも就かせないよう」活動していた。[14] しかし、ベルギーの期待もむなしく、ルムンバが指導的立場を占める形で新政府が形成された。ルムンバは首相職に、選挙で第二党となったアバコ（Alliance des Bakongo）党の党首ジョセフ・カサブブ（Joseph Kasavubu）が大統領職に就任した。しかし、短期間で作られた新政府は弱体であり、内部対立の要素を孕んでいた。

間もなくして、この新政府はその脆弱さを露呈することになった。独立からわずか五日後、この国は新設されたばかりの国軍の反乱と社会的混乱、そして旧宗主国軍の介入を経験することになった。コンゴ危機が始まったのである。この危機の始まりの過程について、本稿では詳細に論じはしない。しかし、二〇〇一年に公開されたベルギ

ー上院報告書およびドウィットの研究書によると、下記の四つの特徴を指摘することができる。第一に、ベルギー政府高官は新首相ルムンバに強い敵意を抱いており、混乱鎮圧においてルムンバと協力する意志をほとんど持たなかったばかりか、殺害をも含む手段で彼の「除去」を考えていたということ、第二に、特定の地域を除いて労働者のストライキが各地で続発し、そのストライキの影響は、規律を失っていた新設コンゴ国軍にも飛び火し、社会的混乱状態が生まれていたこと、第三に、社会的混乱状況はベルギー軍にコンゴ介入の口実を提供し、その介入はコンゴ政府のベルギー軍撤退要求の後も継続され、最終的にベルギーとコンゴの外交的断絶に至ったこと、第四に、このような社会的混乱の中で、コンゴで最も天然資源に恵まれた東南部諸州、特にカタンガ州のコンゴからの分離独立という事態が起こったということである。この四つの特徴のうち、第一の点を背景として、第二の点についてはベルギー報告書とドウィットの研究書とでは、ベルギー政府の作為性の評価が分かれるものの、第三、第四の点は、ルムンバに敵意を抱くベルギー政府によるコンゴの不安定化政策および反ルムンバ政策の帰結であったとされる。すなわちベルギー政府は、この社会的混乱に乗じる形で、混乱がそれほど深刻でなかったカタンガに軍隊を派遣し、その独立を支援することによってコンゴの分裂状態を意図的に作り出していったのである。カタンガ分離は、ベルギー政府によるコンゴ不安定化および反ルムンバ政策の中心的な要素であった[15]。要するに、ベルギー政府のコンゴ再支配政策からコンゴ危機は発生したのである。

七月一二日、コンゴ中央政府は、国連事務総長ハマーショルドに宛てて、ベルギーの侵略行為を非難し、国連による軍事的支援を要請する電報を送った。ここにコンゴ問題は公式に国連の検討課題となった。この要請を受けたハマーショルドは、国連安全保障理事会の特別会合を要求した。そして安全保障理事会は、「ベルギー政府に対し、コンゴ共和国の領土からその軍隊を撤退させることを求める」と同時に、「国際連合の軍事援助を受けるコンゴ政

府の努力によって、コンゴ公安軍が十分その任務を遂行できるようになったとの見解を同政府が示すまでの期間、コンゴ共和国政府と協議の上で、必要な軍事支援を同政府に提供するために必要な措置をとる権限を事務総長に与える」ことを決議した[16]。この決議文の「軍事支援」とは、コンゴ国連軍を派遣することを意味していた。国連軍はコンゴの「法と秩序の維持」をその目的として掲げた。ただし安保理はベルギーの侵略性についての認定は行わなかった。

ところで、ハマーショルドは、コンゴ国連軍を派遣するにあたって、この「法と秩序の維持」という目標に重ねて、ある考えを抱いていた。それはアフリカを東西対立の争点にするべきではないとの考えである。彼はかねてから「アフリカは、現在、我々が経験しているような紛争、競争そして冷戦の外側にある世界である…。そして私は、この世界の一部が依然としてそれら問題の外側にあり続けることを望んでいる」と語っていた[17]。コンゴ独立以前の一九六〇年五月頃よりコンゴ情勢に多大な関心を払っていたハマーショルドは、このような「アフリカで冷戦を回避する」という考えを、コンゴでの国連平和維持活動の重要な目標として位置づけた。それゆえ、ハマーショルドは、上記の安保理決議をもとに、東西陣営に属さない中立国からの派遣部隊を集め、コンゴ国連軍の編成を進めたのであった。エチオピア、ガーナ、ギニア、モロッコ、チュニジアなどの国々から構成された国連軍がコンゴの各地に展開されることとなった。国連軍司令官には、パレスチナの国連平和維持活動に従事した経験をもつスウェーデン人のカール・フォン・ホルン（Carl von Horn）中将が、そして国連事務総長特別代表にはアメリカ人の国連事務次長ラルフ・バンチ（Ralph Bunche）が任命された。

こうして、コンゴ国連軍が設立されたが、この国連軍活動がその発足時からアメリカの強い影響下にあった点は留意されねばならない。まず人的構成の面で、アメリカの当該活動への影響力は極めて強かった。国連事務総長ハ

マーショルドはスウェーデン人であったが、彼の顧問は西側諸国から選ばれ、コンゴ問題に直接関わる重要なポストはすべてアメリカ人で占められていた。上述の通り、コンゴ国連軍の初代代表に就任したバンチ国連事務次長は、アメリカ国籍を有し、国務省勤務の経歴を持つ人物であった。もちろん、バンチがアメリカ政府の指示に従って活動していたとは言い切れない。しかし、バンチはコンゴの首都レオポルドビルのアメリカ大使館の通信手段を利用して国連本部との連絡を行い、アメリカ大使と緊密に行動していた。[18] またバンチが八月に国連本部に帰任した後、彼の任務を引き継いだアンドリュー・コーディアー（Andrew Cordier）も、国務省に勤務した経歴を持つアメリカ人であった。彼もまた、後に見るように、アメリカ大使と緊密に連絡を取り合いながら業務を遂行した。彼は、アメリカ大使と対談する時、自らのことを「我々の側」と称し、[19] アメリカとの一体感を示していた。さらに、コンゴから報告される電報等に直接接し、コンゴ情勢をハマーショルドに報告し、彼と緊密に協議する立場にあった国連事務局アフリカ問題担当官ハインツ・ウィーショフ（Heinrich Weisschoff）もまたアメリカ人であった。このような人的な面に加えて、国連は資金・技術面でもアメリカに大きく依存していた。約四年間の活動の中で、アメリカがコンゴ国連軍に拠出した資金は、総支出の四十八パーセントにのぼった。機材や物資の提供面でもアメリカは積極的に同活動を支援していた。[20] アークハートは、その回顧録のなかで、アメリカ空軍の軍事輸送サービスがなかったならば国連軍の現地展開が不可能だったと記している。[21]

国連事務局側がアメリカの意向を気にかけていたエピソードがある。コンゴ国連軍エリザベトビル代表部代表を務めたコナー・オブライアン（Conor Cruise O'Brien）は、その回顧録の中で、「東側陣営諸国は概してその活動から排除され」ており、また「共産主義諸国の国籍を持つ事務局職員がコンゴの電報を見ることが出来ないよう注意が払われていた」と記述している。中でも、上述のウィーショフは、コンゴから入ってくる全ての情報を直接ハマ

ーショルドに手渡し、これを彼の直接の上司であるロシア人ゲオルギー・アルカジェフ（Georgi Arkadev）には見せなかったという。[22] 逆にハマーショルドは、時に「極秘報告書」をアメリカの大使に見せることがあった。[23]

このようにアメリカが国連に強い影響力を保持しえたのは、アメリカが国連を外交政策上の道具として利用することを目的意識的に追求してきたことと無関係ではない。アイゼンハワー（Dwight D. Eisenhower）大統領は、その在任期間を通じて、国連を「我々の広範な国家目標の推進のために活用しうる手段」となすべく模索しつづけた。[24] その結果、アメリカは、国連をその対外政策の手段として利用できる状況を作り出すことが出来たのである。当時、国連安全保障理事会は五常任理事国のうち四カ国が、そして六非常任理事国のうち三カ国が親西側勢力で占められていた。また国連総会でも、アジア・アフリカ諸国から十二の支持を獲得するだけで、親米的な勢力が全議席の三分の二を占めることができた。また前述のとおり、バンチ、コーディアー、ウィーショフといった国連事務局の上級職員は、アメリカ人であった。事務局の百のトップポジションのうち、ほぼ半数がアメリカ、イギリス、フランス国籍の人物で占められていた。[25] こういった状況は偶然の産物ではなく、アメリカの政策の帰結であった。[26]

ところで、アメリカは、コンゴ国連軍に何を期待していたのであろうか。一九六〇年八月の大統領報告書は、コンゴ国連軍派遣の利点に関して次のように記している。

「強調されるべき国連コンゴ支援の利点…（一）〔国連による支援の〕代替案として考えられるアメリカだけによる一国的支援は、東側陣営による支援を自動的に引き起こし、その結果、コンゴの再建を冷戦闘争へと転化させてしまう。（二）緊急時の再建任務を国連に集中化することは、よりよい効率性をもたらし、そして全世界の資源の漏れだしを防ぐ。[27]」

「冷戦闘争の回避と天然資源の管理」、これがアメリカのコンゴ国連軍への期待であった。この文書から明らか

なことは、アメリカが国連を介したコンゴの天然資源の管理、再開発を目指していた点と並んで、コンゴ問題に関する自国の一方的関与がソ連の自動的関与を引き起こし、当該問題を東西対立へとエスカレートすることを懸念していたがゆえに、コンゴ国連軍活動を支持したということである。この後者の点、すなわち、「アフリカで冷戦を回避する」という点で、アメリカとハマーショルドの国連軍への期待は一致していた。

もちろん、この一致をもって、「アフリカにおける冷戦の回避」という「言葉」がアメリカと国連との間で同じ意味を有していたとは言えない。国連の場合、それ自体がハマーショルドの希望や目的であったと考えられるが、他方アメリカの場合、「アフリカにおける冷戦の回避」とは、反ソ・反共封じ込めという全般的な冷戦戦略のなかでの政策目標の一つであった。したがって、アメリカがコンゴ問題に直接関与しないという点を除けば、それは事実上、「コンゴからのソ連の排除」を意味した。八月一八日、国務次官ダグラス・ディロン（Douglas C. Dillon）は、「アメリカは、国連がコンゴにおいて類い希な立場を作り上げていることに鑑みて、彼らを後援した。そして我々は、ソ連を外に置き続けることにかなりの程度成功した」と語った。[28]

さて、コンゴ国連軍活動に関するイニシアティブの所在について、コンゴ国連軍に参加した元国連事務次長アークハートは、次のような『オブザーバー』紙の文章を引用しながら、国連側にイニシアティブが存在したことを強調している。

「朝鮮における国連の活動は、事実上アメリカの活動であった。コンゴではそれは、まさに国連のものだった。どの大国も中心ではない。国連事務局が全責任を負っている。諸国は、大なり小なり補佐役なのである。[29]」

これが実態であったとすれば、ハマーショルドの構想をアメリカ側が受け入れたという解釈が出来る。しかしながら、実際は逆であったと考えるべきだろう。上述の通り、アメリカからの人的・物的支援が無ければ、コンゴ国

連軍の活動は恐らく不可能だった。アメリカは、コンゴ問題への関与に少なからざる関心を抱き、国連を介した関与を外交政策として推進していた。[30] 資金面で見ると、一九六〇年から六三年までの間、アメリカの対コンゴ支援の額は二億九千九百七十万ドルに上り、そのうち四十パーセントにあたる一億千八百五十万ドルがコンゴ国連軍のために拠出された。さらにアメリカ議会は、コンゴに緊急事態が発生した場合に備えて、大統領が自由裁量で使える一千万ドルの予算を用意していた。[31] アメリカは、コンゴ国連軍を自国の対コンゴ政策の文脈で利用するという、強い動機を有していたと考えられる。[32] このようなアメリカの積極的関与の姿勢は、コンゴ国連軍活動の方向性に対する大きな規定要因となった。すなわち、アメリカの意向を無視するような政策を国連が採用することなどは、はじめから難しい話だったのである。オブライアンは、「ワシントンの信任を失った国連事務総長は、辞任せざるを得ない」状況にあったと語った。[33] 後にケネディ政権の国務次官となるアベレル・ハリマン（Averell W. Harriman）が誇らしげに語ったように、コンゴ国連軍の派遣とは、実際のところ「受け入れられた国連の計画を、アメリカが支援するというのではなく、アメリカが行う事業であった」のである。[34]

二　カタンガ分離の「国内問題」化と国連軍の駐留

国連軍がコンゴに展開するにあたって最も重要な問題は、分離宣言を行っていたカタンガ州の取り扱いであった。上述の通り、カタンガ分離の問題とは、ベルギー政府によるコンゴ不安定化・反ルムンバ政策の結果であった。ベルギー政府は、コンゴ国内の混乱に乗じ、コンゴの経済的要衝である同州にベルギーの傀儡政権を作りあげ、こ

れによってルムンバの政府を弱体化させつつ、コンゴ独立後もカタンガの経済利権を保持することを意図していたのである。したがって、ベルギーは、カタンガの分離独立の既成事実化に強い動機を有していた。

国連軍派遣の二週間後の一九六〇年七月末までに、ベルギー軍はコンゴの大部分の地域から撤退し、コンゴ国連軍と交代した。しかしカタンガは別であった。ベルギー政府は、カタンガ分離の終結に繋がるような国連軍の駐留には反対であった。ベルギーは、「カタンガ政府」を介して国連軍の駐留に抵抗した。ベルギー政府から直接命令を受け、その支配下にあったカタンガ技術顧問団団長アスプリモンド・リンデン（Harold d' Aspremont Lynden）は、様々な形で白人入植者や親ベルギーの「カタンガ政府」政治家を通じて、国連軍進駐への反対行動を展開させた。[35] その支援を受けて、「カタンガ政府」の首相モイセ・チョンベ（Moise-Kapenda Tshombe）も、徹底抗戦の意志を表明した。このような状況下のカタンガを訪問していた国連職員は、現地には国連に対する並々ならぬ敵意が存在すると報告した。国連事務総長は、カタンガへの国連軍進駐を躊躇していた。

事態は、八月九日、国連安全保障理事会で新決議が採択されたことによって打開された。新決議は、「ベルギー政府に対し、事務総長によって決定された迅速な方法に従い、同国軍をただちにカタンガ州から撤退させ、あらゆる可能な方法で安全保障理事会の諸決議の利用を援助するよう求め」た。[36] この結果、国連事務総長はカタンガに入ることが出来ることとなり、また、ベルギー軍を同州から退却させる権限を与えられたのである。八月一二日、国連軍はカタンガへの進駐を開始した。そしてハマーショルドもコンゴへ赴き、スウェーデンの部隊をカタンガに展開させた。

ところがこの決議は、国連軍のカタンガ進駐を進める一方で、カタンガ分離の行方に決定的な影響を与えるもう一つの重要な内容を伴っていた。同決議は、その第四項において、「コンゴ国連軍は、憲法上の紛争であろうと、

いかなる国内紛争についても、当事者とならず、またはいかなる方法によっても干渉せず、もしくはその結果に対して影響を与えるために使用されることもない」ということも併せて謳っていたのである。ハマーショルドは、この規定を援用し、カタンガの問題とは中央政府と地方政府というコンゴの「国内問題」であると主張した。彼は、「カタンガのケースにおいて、安保理が直面している困難」は、「ベルギー人の態度によるものではない」のであって、「これは、国連が組織として明らかに一方の側につくことの出来ない国内問題である」と論じた。[37]

ハマーショルドがカタンガの分離問題を「国内問題」と定義したことは、コンゴ国連軍が分離問題の解決に関与できないということを意味した。これは分離勢力を勇気づけた。彼らは、問題をコンゴの「国内問題」として描き出しさえすれば、分離状況を継続することが出来ることとなった。ハマーショルドが問題にしたのは、「公式の」ベルギー軍の存在だけであったため、ベルギー政府が国内の分離勢力を介して隠然とベルギー軍を駐留させたとしても、国連軍は手出しが出来なかったのである。実際、カタンガのベルギー軍の多くは撤退せず、その下で分離の状況は固定化されていった。八月の安保理決議の後、ベルギー政府は、表向きは軍の撤退は完了したとの立場をとり、国連に「協力的な」態度を示していた。しかしその一方で、ベルギーは、軍服を以前使われていた植民地軍のものに代えるなどして、幾つかの部隊を駐留させ続けたのである。また同国は、カタンガの経済開発を進めていた企業ユニオンミニエール（Union Minière du Haut-Katanga）を介して、「カタンガ政府」に財政的支援を与えていた。カタンガでは、ベルギー政府に責任を負うベルギー人将校が指導的役割を担い、「カタンガ政府」がベルギーの財閥の財政的支援を受けて、傭兵からなるカタンガ憲兵隊を組織していた。このような事態を可能にしたのは、カタンガにいるベルギー人達は「カタンガ政府」や地元私企業からの要請によって残っているのであり、ベルギー政府とは関係がない、というベルギー政府の論理であった。[38] かくして、ハマーショルドがカタンガ問題を「国内問題」

と定義したことによって、コンゴの分離状況が固定化されることになった。

ところで、後に国連は、この「カタンガ分離問題はコンゴの国内問題である」という認識が誤りであったことを認め、カタンガへの外国勢力の介入を問題視した。六一年一一月二四日、国連安全保障理事会は、カタンガの外国勢力を排除するために国連軍が武力行使を含む積極的行動をとることを決議した。その際、採用された論理とは、六〇年八月の時点でハマーショルドが行った「国内問題」という定義は誤解に基づいていた、というものであった。[39]

なぜハマーショルドは、「誤った」のであろうか。従来、この根拠はハマーショルドの情報不足という点に求められてきた。ハマーショルドについての伝記の中で、アークハートは、カタンガの傀儡性についてハマーショルドは「まだ十分に知らされていなかった」と主張している。[40] しかし、近年明らかとなった資料は、ハマーショルドがこの時期に「カタンガ政府」の内実について十分な報告を受けていたという事実を示している。例えば、八月六日、国連事務次長バンチは、ハマーショルドに次のような電報を送っていた。

「（チョンベは）ベルギー人に操られた傀儡である。彼は、ベルギー人の指示なくしてはいかなる決定も行わない。またいかなる公式の会合もベルギー人の出席なくしては開かれることはない。そしてベルギー人がいなくては、彼は決して権力の座につくことはなかっただろう。[41]」

ハマーショルドは、間違いなくカタンガの傀儡性を知っていたのである。しかも、八月七日、アメリカ大使との会談の際、ハマーショルドは、カタンガにおけるベルギー軍の存在が「現実問題」であることを認めながらも、報告書上では、その事実を「違ったように描き出す決定をした」ということを自ら吐露しているのである。[42] ハマーショルドは、意識的に「偽り」を語っていた。それでは、なぜハマーショルドは、あえて「偽り」の認定を行ったのであろうか。

一つの可能性は、ハマーショルドが国連軍のカタンガ進駐を「早急に行わねばならない」という事情を重視していたということであろう。この時期に、ハマーショルドは、ルムンバから、国連が迅速にベルギー軍を撤退させ、カタンガに国連軍を駐留させることが出来ないのであれば、コンゴ中央政府はコンゴ国連軍撤退の要請を行うという意志を伝えられていた。バンチも、ルムンバの要請に直ちに応えないならば「国連軍はコンゴにとどまることが出来ないだろう」と報告した[43]。他方、国連軍の進駐をめぐって、ハマーショルドは「カタンガ政府」からの激しい抵抗に遭っていた。この「カタンガ政府」の抵抗の背景には、ハマーショルドが判断するに、チョンベと現地ベルギー人入植者のコンゴ中央政府に対する強い懸念があると考えられた。ルムンバとの政治闘争に明け暮れていたチョンベは、ベルギー軍の撤退によって自らの身が危険さらされることを懸念していた。また入植者達は、自らの生命や財産が保障されないならば、コンゴ国外への脱出を行うつもりであった[44]。そこでハマーショルドは、カタンガの混乱や流血の惨事を避けつつカタンガへ国連軍を駐留させるには「カタンガ政府」に何らかの保障を与える必要があると判断した。このような事情から、ハマーショルドがチョンベに対する保障のひとつとして「国内問題」の議論を提示したという可能性が考えられるのである。

しかし、ハマーショルドの「偽り」の認定の理由を、これだけで説明するのは難しい。じつは当時、ハマーショルドは「カタンガから手を引く」よう求める激しい西側諸国からの圧力に直面していたのである。西側諸国の中には、カタンガの分離状況を好都合と捉える国々が少なくなかった。分離勢力を梃子として独立コンゴの再支配を構想していたベルギーは当然のことながら、イギリスやアメリカも、ハマーショルドに国連軍のカタンガ駐留が分離の終結に繋がらないよう求めていた。進駐する国連軍がカタンガ分離に影響を与えない形で展開されるべきであるという意見を最も激しく表明したのは、ベルギー政府および王室であった。七月二八日、ベルギー国王ボードワン

（King Baudouin）は、ハマーショルドに秘密書簡を送り、国連軍のカタンガ駐留によってコンゴの主権がカタンガにおよばないようにして欲しいとの要請を行った[45]。またベルギー政府も、国連安保理の委託任務が「法と秩序の維持」である以上、法と秩序が安定的に保たれているカタンガの分離状況に国連軍は影響を与えてはならないという主張を行った[46]。イギリス政府もハマーショルドにベルギーと全くの同意見であることを伝えていた[47]。イギリスの場合は、ベルギー同様、カタンガ分離そのものに政治的・経済的な直接利益を有していたからであった[48]。ベルギーやイギリスとはやや理由は異なるものの、アメリカ政府もカタンガの分離を黙認するつもりであった。アメリカの場合、カタンガにおける政治的・経済的利益は、ベルギーやイギリスのように直接的なものではなかったが、西側同盟全体の利益という観点から、分離は必ずしも悪くはないと受け止められていた。カタンガの鉱物資源は、ベルギーの支配下で対共産圏輸出統制委員会（ＣＯＣＯＭ）の規制のもとにおかれていた[49]。アメリカ国務省アフリカ局の国務次官補ジョセフ・サタースウェイト（Joseph Satterthwaite）は、カタンガ問題に対するアメリカにとっての「正しい道筋」とは、反共的立場を掲げる「カタンガが西側にとっての救済となる可能性の観点から、（カタンガの）承認を拒否する一方で、（カタンガへの）扉を完全に閉じない」ことであると論じた[50]。もちろん、アイゼンハワー大統領はコンゴ駐在アメリカ大使からカタンガにあるベルギー領事が「分離に積極的に活動」していたとの報告を受けており[51]、カタンガ分離の背景にベルギーの支援が存在していることを知っていた[52]。その上で、アメリカは、国連安全保障理事会の席上、国連大使ヘンリー・キャボット・ロッジ（Henry Cabot Lodge）に「国連は、国内政治の論争に巻き込まれることは出来ない」という主張を行わさせていたのである[53]。以上、西側諸国は、ほぼ一致して国連軍のカタンガ駐留が分離状況に影響を与えない形で進められることを希望し、ハマーショルドに対して陰に陽に圧力をかけていたのである。

国際的な圧力という点で、ハマーショルドは、西側諸国からのみならずガーナやギニア、ソ連などルムンバに同情的な「急進派」諸国からの圧力も受けていた。これら諸国は、ベルギーがカタンガを支援している以上、カタンガと中央政府の争いは「国際問題」であると主張した。通常はアメリカに協調的な態度を示し、コンゴ危機に関する過去三度の全ての安全保障理事会決議案を提出し、国連軍の分隊派遣においても中心的な役割を果たしていた「穏健派」のチュニジアも、「国際問題」説を唱えた[54]。これら諸国は「カタンガ政府」の実態を問題にしていたのである。当初、ハマーショルドも「カタンガ政府は存在しない」という見解を抱いていた[55]。しかしその後、公言はしなかったものの、ハマーショルドは、「カタンガ政府」を事実上実態を伴った政府として取り扱う行動を取った。八月一二日、ハマーショルドがカタンガ入りした際、彼はこの訪問の予定をルムンバに相談せず、チョンベと直接交渉を行った。そして国際的な承認を受けていない「カタンガ国旗」の前で、チョンベと共に写真に映ったのである[56]。このハマーショルドの態度の変化の背景にも、アメリカをはじめとするカタンガ分離を求める西側諸国の圧力を認めるのは間違いではあるまい。興味深いことに、この時期、ハマーショルドは、アメリカの国連大使ロッジに、いくつかの国連安保理声明を書くことを手伝って貰っていた[57]。ロッジがどの程度まで、声明の内容に関わっていたのかは不明ではあるが、アメリカの意向が少なからざる程度反映されたと考えるのが自然であろう。

以上、このような西側諸国の求めに応じて、カタンガ問題を「国内問題」と認定したハマーショルドの政策は、カタンガ分離の固定化へと事態を導くとともに、コンゴ危機の行方に、いまひとつ決定的な影響を与えることになった。すなわち、この措置は、コンゴの一体性を願うルムンバをソ連からの支援を受け入れざるを得ない方向へと追いやり、「アフリカで冷戦を回避する」という構想に水をかける結果をもたらしたのである。かくして、西側諸国とハマーショルドは、自らの政策の失敗を埋め合わせねばならなくなっていった。

三　クーデターを支えたコンゴ国連軍

コンゴの国内情勢は悪化の一途をたどっていた。「国内問題」の議論を背景にして、ベルギー政府は、カタンガと同様にコンゴの他の地域の分離政策も推し進めていた。八月六日、ベルギー政府は、ダイヤモンドの産出で世界的に有名な南カサイ地方を分離独立させた[58]。カタンガと南カサイの分離は、コンゴの経済運営にとって死活問題であった。両地方からの収入だけでも中央政府財政の三分の二以上を占めていた。ルムンバが分離状態を一刻も早く終結させたいと考えたのは自然なことであった。ルムンバは、分離終結に必要な措置を採るよう何度もハマーショルドに要請した。アメリカにも同様の要請を行った。しかし、国連やアメリカに対するルムンバの期待は全て裏切られた。その頂点が八月決議の採択であった。

八月下旬、ルムンバは、事態を打開するためにソ連からの軍事支援を受け入れることにした。正確な時期は不明であるが、ソ連からの軍事支援が続々とコンゴに到着し始めた。アメリカ政府で確認できただけでも、八月二二日、若干のソ連技術者と百台のトラックがコンゴに到着した[59]。また八月二五日頃には、十機のイリューシン十四輸送機がレオポルドビルで確認され、コンゴ国軍の部隊をカサイ州のルルアボルグへと空輸するために用いられていることも確認された[60]。ルムンバは、このソ連からの支援を分離勢力への攻撃に利用した。ソ連からの支援の規模は小さかったが、ソ連が自己の勢力圏を越え、その国境線から数千マイル離れた地域紛争に軍事的に介入することは、冷戦の開始以来初めてであった。この前例のない事態は、ルムンバによってもたらされた。コンゴに「冷戦がやってきた」のである[61]。

ルムンバがソ連支援を受け入れた結果、西側諸国は、彼に対する強い敵意を抱くようになった。ベルギーやアメ

リカのその敵意は、コンゴ国内における秘密工作に結実していった。ベルギー政府は、コンゴ東南部諸州に対する分離政策と平行して、ルムンバの政府を不安定化させる工作を、首都レオポルドビルにおいても展開した。ベルギー政府は、議会の承認を得て、総額五千万ベルギーフランの「秘密資金」を投入し、ルムンバに対する反対報道の展開、敵対政治家の買収・組織化を進めていった。[62] アメリカでも、八月一八日、アイゼンハワー大統領がコンゴ国内における秘密工作の実行案を承認し、[63] 中央情報局（ＣＩＡ）に白紙委任状を与えた。アメリカの場合、ＣＩＡがソ連による軍事支援の可能性を「あり得ない」と結論づけていたこともあり、[64] ソ連の支援実施という事態は動揺を引き起こした。ＣＩＡは、ベルギーの諜報員と共同して多くの資金を注ぎ込んだ。ＣＩＡ長官アレン・ダレス（Allen Dulles）は、政治的秘密工作の為に、八月だけで十万ドルの出費を承認し、[65] 在レオポルドビルのＣＩＡ支局は、ルムンバに敵対するコンゴ人政治家達を組織していった。この時、ベルギーやアメリカが接近していた勢力は、後にビンザグループと知られる親西側の指導者達であった。カサブブ大統領、ジョセフ・イレオ（Joseph Ileo）元老院議長、ジャスティン・ボンボコ（Justin Bomboko）外務大臣、ビクトル・ネンダカ（Victor Nendaka）警視総監、アルバート・ンデレ（Albert Ndele）財務委員、ジョセフ・モブツ（Joseph Mobutu）大佐といった政治家・軍人達である。ベルギーやアメリカは、彼らルムンバに敵対する勢力を通じて反ルムンバのクーデター計画を進めていった。

驚くべきことに、近年公開された資料によると、西側諸国政府と同様に国連の上級職員達もルムンバに強い敵意を抱いており、ルムンバの政治的失脚を望んでいたことが明らかである。七月二二日の安保理決議は、「全ての国家に対して、法と秩序の回復とコンゴ政府による権限行使を妨害するおそれのあるあらゆる行動を差し控え、またコンゴ共和国の領土保全と政治的独立を損なうようなあらゆる行動を差し控えるよう要求する」と謳っていたにもかかわらず、[66] 国連職員達は、西側諸国が行っていた秘密工作の存在を知っており、その活動に反対するどころか好

意的でさえあった。八月二八日付のコーディアーの手紙は、以下のように、国連職員のルムンバへの敵意を明確に語っている。

「唯一の現実的な問題解決方法は、政治指導者を変えてしまうことである。しかしながら、ルムンバを首相の座から排除することは、簡単なことでは無いだろう。さらに、政治指導者を交代させる上で我々が出来うることには限界がある。我々は、コンゴ国内で（ルムンバに対する）政治的圧力を強めさせるように、国際環境において、そのような状況を作りだすことができるだろう。しかしながら、国連憲章のもとで、我々はコンゴ国内における政治指導力のバランスに影響を与えるような政治的意味合いの直接的な活動をすることを禁じられている。国連事務総長は、穏健派政治家に対して様々な方法で（そのような活動を）推奨している。そして、それら穏健派は、他の強力な筋からの力添えを受けている。[67]」

この手紙は、ハマーショルドやコーディアーがルムンバの政治的失脚を望んでいたこと、様々な制約があるものの、国連職員がルムンバの失脚に繋がる活動を推奨していたこと、さらには、国連は「他の強力な筋」からの穏健派政治家への働きかけの事実を知っており、これを肯定的に捉えていたということを示している。「他の強力な筋」とは、アメリカ政府およびベルギー政府のことであったと考えられる。後に見るように、ハマーショルドが少なくともアメリカによる秘密工作の存在を知っていたことは明らかである。

ハマーショルドが、ルムンバの失脚を望んでいたという事実は、他の数多くの資料によっても裏付けられる。八月二八日、アメリカ国連大使ロッジは、次のような電報を国務省に発した。

「彼（ハマーショルド）は、ルムンバが処分されるまではコンゴ情勢は改善されないだろうという電報の中心内容に同意している…。国連事務総長は、コンゴ問題はまもなく危機的状況に陥るのであり、そして、ルムンバは

『破壊』されねばならない（must be "broken"）と考えている。彼は、明らかに、ルムンバと国連との間に新しい危機が起こると予想している。そして彼は、この危機において、国連は勝利をおさめるであろうし、コンゴにおけるルムンバの政治権力は堀り崩され、そしてカサブブもしくはイレオが実効的支配を行うことができるだろうと考えている。[68]」

さて、ルムンバは、ソ連からの支援を受けた結果、ますます国連軍と距離を取るようになった。彼は、ソ連からの支援がある以上、分離終結に役に立たない国連軍はもはや必要ではないと考え、国連軍のコンゴ領土からの撤退要求をほのめかし始めた。ルムンバは、主権国家であるコンゴの要請に基づいてコンゴ国連軍が派遣されてきた以上、コンゴがその撤退を要請するならば、国連軍はコンゴ領土から出て行かなくてはならないと主張した。このようなルムンバの行動は、コーディアーの言葉を借りるならば、「小さなヒトラー」ルムンバが「一方的支援競争のゲームに興じ、コンゴにソ連の影響力浸透の扉を開こうとする」ものとして国連側には写った。[69] ハマーショルドは、ルムンバのこの動きに大きな危機感を抱き、「彼（ルムンバの）権力を、よりいっそう制約することが出来ないのであれば、いかなる安定的な解決法も構想できない」と感じ始めた。[70] そして彼は、「ルムンバが権力の座に居座り続けるならば、国連の活動を継続することが出来ないだろう。我々かルムンバのどちらかが、出て行かなくてはならないのだ」と考えるようになった。[71] 国連とコンゴ政府との対立の種になっていたカタンガ問題について、「いったんルムンバが片づいてしまえば、カタンガの状況は自然に解決するだろう」とも考えられた。[72] かくして、ハマーショルドは、ルムンバとの「対決を渇望」するまでになったのである。[73]

九月五日、西側諸国の秘密工作が具体化した。この日、カサブブ大統領はラジオ放送を通じて、ルムンバを含む他の六人の大臣を解任し、後任首相としてジョセフ・イレオを指名すると発表した。多くの研究書が指摘すること

だが、このクーデターとも言うべきルムンバの解任劇の背景には、激しい部族対立が存在していたのは事実である。独立以前から、カサブブとルムンバの間の協調関係は、緊張を伴う微妙なものであった。コンゴ駐在アメリカ大使クレア・ティンバーレイク（Clare H. Timberlake）は、二人の関係について、「彼らはお互いを信用していないがゆえに、お互いを監視するために緊密にくっついていた」と報告した。[74] しかし、このクーデターを国内政治対立の文脈からのみで捉えることは出来ない。[75] このクーデターは、西側諸国の支援をうけて行われたものであり、外部からの支援なしには成功できなかったと考えられる。

そもそもカサブブの指導力は、国務次官ダグラス・ディロンの言葉を借りれば、「（軟弱な）スパゲッティ」のようなものであった。[76] 彼は、ルムンバのように決断力や実行力を備えた政治家ではなく、自らの判断だけでは動くことのない人物であった。コンゴ政府が国連に支援を要請した時も、またルムンバがソ連の支援要請を行った時も、カサブブはルムンバの決定に同意した。しかし、彼は西側諸国からの圧力も受けていた。ベルギーのガストン・エイスケンス（Gaston Eyskens）首相は、カサブブの政治顧問を通じてルムンバの解任を要求し、またピエール・ウィニー（Pierre Wigny）外相も、そのために必要な法的なアドバイスをカサブブに与えていた。[77] アメリカも同様であった。カサブブのクーデターの十日前、アメリカの国家安全保障特別会議では、ルムンバを憲法によって除去する方策についての議論が行われた。[78] 元ＣＩＡ職員であったアンドリュー・タリー（Andrew Tully）は、その回顧録の中で、ＣＩＡ職員がカサブブに「ルムンバを退陣させる責任を彼が有しており、そして新しい政府を作ること」を気づかせたと述べている。[79] このような圧力がカサブブに決断を促したのである。

国連軍も、カサブブのクーデターの背後にいた一勢力であった。近年公開された資料によると、九月一日から七日の間、ニューヨークに戻っていたバンチに代わってコンゴ国連軍の最高責任者の立場にあったコーディアーは、

カサブブのクーデター計画を事前に知らされており、カサブブに直接アドバイスを与えていたことが明らかとなっている。コーディアーは、少なくとも四回に渡ってカサブブと会談し、ルムンバ解任の可能性を議論した。その際、コーディアーは、「国家の緊急事態の場合には、国連軍の役割には限界があるということを含めて、詳細に国連軍活動の範囲を説明した」のであった。[80] さらに彼は、クーデターの数時間前にもルムンバの解任を実行するとの情報を知らされていた。この情報を受けたコーディアーは、カサブブに護衛を提供するなどの「予防措置」をとることによって「カサブブの背後で手助けをした」のである。[81] その際、彼はカサブブのベルギー人顧問ヴァン・ヴィルセン（Jef Van Bilsen）を通じて、次のようなメッセージをカサブブに伝えていた。

「国連軍代表が国内問題に干渉することは出来ない。しかし、もし大統領が主導権を維持し続けるのであれば、国連や駐留する『ブルーベレー』は、彼（カサブブ）の有利なように活動することが出来るだろう。[82]」

ルムンバの解任が宣言された直後、コーディアーは、コンゴの空港の封鎖とラジオ局の閉鎖という二つの措置をとった。ティンバーレイクが「我々はコーディアーに働きかけていた」と認めるように、[83] これもアメリカ政府の希望に応じたものであった。これらの措置は、名目上、内戦という流血の惨事を避けるための措置であり、政治的には中立な活動であるとされた。しかし実際には、ルムンバに不利に、カサブブに有利に働くように企図された措置であった。ラジオ局の閉鎖措置の結果、ルムンバは、首都における政情を国民に訴える手段を奪われてしまった。その一方で、カサブブは、自らの同盟勢力であるフルバート・ユールー（Fulbert Youlou）大統領の許可を得て、隣国ブラザビル・コンゴのラジオ局を利用し、レオポルドビルの支持者に向けて演説することができた。さらに、いまひとつの措置である国連軍の空港封鎖は、実は不徹底で恣意的であった。カサブブの支持者は「封鎖された」空港の利用を許可された。九月七日、国連軍は、九トンの武器を積んだサベナ航空機が、エリザベトビルの空港に

着陸することを許可した。[84] 他方、ルムンバの支持者の乗った航空機の着陸は認められなかった。恐らくこの国連軍の介入がなければ、ルムンバはカサブブとの権力闘争に勝利していただろう。なぜなら、ルムンバは議会の大多数の支持を得ており、コンゴ国軍の部隊の大部分を支配下においていたからである。しかし、ルムンバは、カタンガに派遣していた国軍部隊を首都へ帰還させることが出来なかった。まさに「国連司令部は、コンゴにカサブブ大統領の権力を確立するべく努力し、ルムンバを権力の座から取り除こうとする最初の試みのお膳立てを行っていた」のである。[85]

ところで、これまでのコンゴ危機研究では、上述二つの措置をとるに当たり、コーディアーがコンゴ駐在アメリカ大使ティンバーレイクと緊密に協調する一方で、ハマーショルドとはあまり協議を行わなかったとするものが多い。[86] アークハートは、コーディアーによる空港封鎖措置の情報を受けたハマーショルドがこの措置に「びっくり仰天した」と述べている。[87] しかし、ハマーショルドがクーデターをめぐる国連軍活動の予定を全く知らず、空港封鎖等の措置がコーディアーの独断で行われたという解釈を、そのまま受け入れることは難しい。なぜなら、国連軍が空港封鎖措置を取る可能性を、ハマーショルドが事前に想定していたことは疑いがないからである。八月中旬以降アメリカ政府内では、ソ連の介入の可能性を想定して、統合参謀本部が国連軍による空港封鎖措置を強く求めていた。[88] そして八月二六日には、国連大使ロッジが、二八日にはティンバーレイク大使が、この政策執行の可能性をハマーショルドと話し合い、これら会合において、ハマーショルドは「全ての必要な措置を取る」とアメリカ大使に伝えていたのである。[89] ただしアメリカ政府の資料によると、カサブブのクーデターは、当初の予定よりも早く実施されたことが明らかとなっている。九月七日、国家安全保障会議の席上、ＣＩＡ長官ダレスは、カサブブのクーデターが十分な計画を欠いたまま、予定の二日前に実行されたと述べている。[90] したがって、ハマーショルドがカサブ

ブのクーデターやコーディアーの措置に驚いたのは事実としても、彼はクーデターや措置の内容に驚いたのでは無く、そのタイミングについてであったと考えられよう。

いずれにせよ、カサブブのクーデターおよびその後のコーディアーの措置は、まさにハマーショルドが望んでいたことだった。ハマーショルドは、「私は、複雑な憲法の分析や、複雑な憲法状況の分析を行いたいとは思わない。しかし、コンゴ憲法によると、大統領には首相を解任する権利があるという規定を見出す」と語り、カサブブの行動の正当性を論じた[91]。しかし、この解釈には疑問が残る。首相解任に当ってカサブブが依拠した規定は、コンゴの憲法にあたる基本法第二〇条および二二条であった。この二つの条項は、ベルギー憲法の国王の権限にあたる条項に倣って規定されたものであった。ベルギー憲法は文面上、国王が議会の不信任動議なしに大臣を解任する権限を認めていたが、一九一一年以降、ベルギー国王は、首相みずからが辞任を申し出た場合、あるいは議会によって解任決議がなされた場合に、それを単に受理することを慣行とした。コンゴにおける大統領の地位も、ベルギーの国王の地位に類するものと考えられた。アメリカ政府文書も、コンゴにおいても大統領の地位が「儀礼上のもの」であることを確認している[92]。したがって、コンゴにおける大統領の権限行使を、ベルギーにおける国王の権限行使に倣うべきものとして考えるなら、ルムンバが議会の信任を得ていたのが明白な事実であったことに鑑みても、ハマーショルドがこのような解釈を出すのは行き過ぎた行為であったと言わざるを得ない。

しかし、ハマーショルドは、カサブブの活動をまたとない好機として捉え、この行き過ぎをあえて行っていたようである。なぜなら、ハマーショルドは、カサブブの権力掌握を待望しており、したがって、カサブブの「超憲法的」行為を意図的に正当化したことを伺わせる事情があるからである。カサブブの権限についての解釈を表明する二日前の九月七日、ハマーショルドは、アメリカ国務省国際機構局国務次官補ウドルフ・ウォルナー（Woodruff

Wallner）に対し、「試みようとしているのは、超憲法的な活動を通じて、国連やカサブブ自身の立場を危うくすることなく、ルムンバを取り除くことである」と語り、「ルムンバとの闘争においてカサブブを承認し、彼と手を結び、そして暗に彼を強力に支持する」との意志を明らかにした[93]。

かつてハマーショルドは、「国連軍はいかなる形でも、国内問題のいかなる派閥にも支援を与えることは出来ない」とルムンバに伝えていた[94]。しかし、この時は、国連軍がコンゴの内政に干渉することを厭わなかった。彼は、「国連の活動は、カサブブを贔屓にし、またカサブブに有利に働くよう計画されている一方で厳密に公正であるものとして描き出しうるものである」と語っていた[95]。

ところで、西側諸国の秘密工作やカサブブに対する国連軍のてこ入れにも拘わらず、ルムンバはカサブブを圧倒する政治指導力を発揮していた。九月七日、コンゴ議会下院に登場したルムンバは、「ベルギーがチョンベに航空機を提供し、国連とアメリカが自分を見捨てた時になって初めてロシアに航空機を求めた」のだと、ソ連への支援要請の事情を説明し、カサブブによる解任を無効であると宣言し、国連軍の干渉を非難した[96]。九月八日、下院は、圧倒的多数でルムンバの復権に賛成した。その翌日、上院も下院決議に従った。結局、アメリカの目から見ても、「ルムンバのコンゴ人に対する影響力は、カサブブのそれよりも際立っていた」のである[97]。こうして、カサブブのクーデターは失敗に終わった。

しかし、西側諸国やハマーショルドがルムンバの排除をあきらめたわけではなかった。ベルギー政府は、秘密活動の再調整に着手した[98]。アメリカも、ルムンバに敵対する政治家達への働きかけを強めていった。ハマーショルドもこの動きに同調した。九月一三日、大統領選挙に副大統領候補として出馬したロッジに代わりアメリカ国連大使に就任したジェームズ・ワズワース（James J. Wadsworth）は、「我々は、カサブブ達の背後で、カサブブのルムン

バ追放活動を支援し続けるだろう」と秘密工作継続の意志をハマーショルドに伝えた。そしてその返答として、ハマーショルドは、「我々は依然としてルムンバを破壊できると信じている」と語った。[99]

次なる反ルムンバ闘争を担ったのは、当時コンゴ国軍将校であったジョセフ・モブツであった。九月一四日、モブツは、ラジオ放送でカサブブとルムンバの双方を「中立化」させると同時に、議会の停止を声明した。これは新たなクーデターであった。モブツは、コンゴ陸軍には政府を引き継ぐ意志はなく、代わりに学生や技術者による「委員会（College des Commissaires）」によって一九六〇年一二月三一日まで統治が行われると宣言した。その際、彼は国連との共同の意志を宣言するとともに、ソ連およびチェコスロバキアの技術者に四十八時間以内の国外退去を要求し、またコンゴ国軍カタンガ部隊への停戦命令を表明した。九月一七日、ソ連・チェコ大使館はコンゴ国内から引き上げ始めた。翌日、モブツはコンゴ国軍のカタンガ攻撃作戦の中止を正式に宣言した。

このモブツのクーデターは、結果的にルムンバにとどめをさすことなった。モブツのクーデターの約四ヶ月後の一九六一年一月一七日、モブツの軍隊によって逮捕されたルムンバは、カタンガの地において暗殺されたのである。

モブツのクーデターにおいても、国連軍は重要な役割を果たした。議会におけるルムンバの勝利が明白となった九月一〇日、ハマーショルドの指令を受けたコーディアーは、賃金未払い状態にあったコンゴ兵士への給与として、コンゴ国連軍から百万ドルの資金を拠出した。この資金は、同じ日に行われた式典の場で、モブツを介してコンゴ人兵士に渡された。コーディアーの意図は、カタンガ攻撃に参加することなく首都に残っていたコンゴ国軍兵がルムンバに動員されることを阻止することにあった。九月一五日のコーディアーの手紙は、「コンゴ国軍への、食料と賃金の支給は、国軍の中立性を維持するために極めて重要な要因である」と記している。[100] また、コーディアーは「この支払いがモブツの権威を築き上げ、部下の支持を増大させるのに役立つだろうという希望」を抱き、「この

支払いの功績をモブツの手柄にするという」目的を持ってこの措置を行っていたとも言われる。[101] さらに首都レオポルドビルでは、コンゴ国連軍モロッコ分隊を率いていたモロッコ人のベン・ケッタニ（Ben Hammou Kettani）将軍もモブツの背後で活動していた。カサブブのクーデターの際、彼はコンゴ国軍が首相兼国防大臣であるルムンバに忠誠を誓うべき存在であることを知りながら、カサブブとルムンバとの間で「中立」であるべきだとの助言を、モブツに与えていた。[102] この措置もまたモブツの国軍内での権威を築き上げ、九月一四日のクーデターへの基礎を提供したのである。

カサブブのクーデターと同様に、モブツのクーデターの背景にもアメリカの秘密工作が存在していた。[103] モブツがＣＩＡによって「見つけ出された」のは、六〇年一月、コンゴの独立決定を討議したブリュッセルの円卓会議の時であった。後にＣＩＡレオポルドビル支局長となるローレンス・デブリン（Lawrence Devlin）は、この時ルムンバの秘書として同会議出席していたモブツに出会った。[104] 以来、デブリンはモブツの「顧問」となり、ＣＩＡから支給された資金をモブツに提供する役割を担っていった。モブツは、この資金を自らの兵士の給与として使った。この資金によってモブツの部下は「アフリカにおける最も裕福な兵士」となったのである。[105] 高給を受けていた兵士は恐らく三百人もいなかったが、彼らは、コンゴ国軍内において唯一有効に機能する部隊を構成した。[106] アメリカの資金面での支援が、モブツの国軍掌握に重要な役割を果たしたのである。

ところで、モブツのクーデターに関して、アメリカの秘密工作と国連軍の活動の間でどの程度の連絡や調整が行われていたのか、この点は依然として不明である。しかし九月一〇日、国連軍を介してモブツに資金を提供した際、コーディアーはティンバーレイクと電話連絡を行い、ティンバーレイクの承認を受けていた事情は明らかになっている。[107] カサブブのクーデターの失敗後に、ハマーショルドが「我々は、依然としてルムンバを破壊できると信じて

いる」とアメリカ大使に語ったことから推測しても、モブツのクーデターにおいても、国連軍とアメリカ政府の間で、何らかの活動調整が行われていたと考えるのが自然であろう。

おわりに

一九六〇年一月一四日、副大統領ニクソンは、国家安全保障会議の席上において、後のコンゴ状勢を予言するかのように、次のように語った。

「アメリカは、アフリカにおける闘争が西側スタイルの民主主義と共産主義との間で行われるのだ、という想定を避けなくてはならない。公然とは語れないが、我々は、アフリカで我々の側につく実力者を必要としていることを認めなくてはならない。…アフリカが民主化するなどと期待するのは野暮なことである。[108]」

独立コンゴの歴史の中で九月一四日のモブツのクーデターほど大きな出来事はなかった。このクーデターによって、コンゴの政治舞台に躍り出たモブツは、六五年に完全に権力を掌握した後、約三十二年間にわたって、この国に独裁体制を敷くことになる。このクーデターは、コンゴに「我々の側の実力者」、すなわち「アメリカの暴君」(S・Kelly) が誕生した瞬間であった。他方、権力の座を追われたルムンバは、六一年一月一七日、カタンガの地において暗殺された。彼は、コンゴ人民から民主的に選ばれていたにも拘わらず、アメリカ、ベルギー、イギリスなど西側諸国から疎まれ続けた。これら諸国は、ルムンバが首相の座を追われた後も、彼の存在それ自体を恐れ、執拗に彼の抹殺のための様々な計画を練り上げ、実行していったのである。この西側諸国の協調介入の過程としてのコ

ンゴ危機を描き出す試みについては、稿を改めてを行うつもりである。いずれにせよ、モブツのクーデター以後、この国に民主主義が取り戻されることはなかったということを強調しておきたい。

本稿は、正統政府打倒のための秘密工作と国連平和維持活動という、本質的に相容れないはずの二つの政治的活動が、コンゴ危機においてどのように結びついていたのかを検討した。本稿で描き出されたのは、アメリカの対コンゴ政策という規定要因のなかで、国連事務総長が「中立」を標榜しつつも「偽り」の状況認定を行い、コンゴにおける西側諸国の秘密工作を黙認し、さらに「中立」を装ったコンゴ国連軍を意図的にコンゴの内政に干渉させることによって、ルムンバを政治舞台から排除し、結果としてモブツという独裁者の登場を支援していったという政治過程であった。このクーデターへの荷担の事実は、少なくとも本稿が検討の対象とした時期において、コンゴ国連軍の中立性が幻想にすぎなかったことを示している。

もちろん、国連軍が「常に」アメリカや西側諸国に荷担し、中立性を放棄していたとは言えない。本稿の対象とした時期においても、コンゴ国連軍がアメリカ政府からの露骨な内政干渉要請を拒否していたケースを認めることができる。例えば、ルムンバに忠誠を誓うコンゴ国軍兵に対する武装解除要請の拒否や、首都レオポルドビルにおけるルムンバの支持者の一掃要請の拒否である。またモブツのクーデターの後、国連軍のコンゴにおける最高責任者となったラジェシュワー・ダヤル（Rajeshwar Dayal）は、カサブブとルムンバとの間での和解を進めようとし、この措置はアメリカや他の西側諸国との軋轢を生むことになった[109]。このような国連側の態度は、西側諸国の圧力に対する「抵抗」であるようにも見える。この「抵抗」の背景に、いかなるハマーショルドの構想があったのか、この問いを検討する必要性はある。その検討の結果、本稿で描き出された国連側のアメリカへの「協調」の背景に、国連平和維持活動を確立するために「アメリカを利用した」というハマーショルドの長期的な構想を見いだすこと

ができるかもしれない。しかし、コンゴの場合、国連におけるアメリカの存在および影響力は、単なる一加盟国以上のものであったと言わざるを得ない。そのことは、ハマーショルドの構想がいかなるものであれ、彼の指導力の下でアメリカと「協調」してコンゴ国連軍がとった措置がこの国の「その後」に決定的な結末をもたらしたことからも理解されるだろう。

注

(1) 過去の国連平和維持活動の一覧は、http://www.un.org/Depts/dpko/dpko/home_bottom.htm を参照。

(2) 例えば、Ernest W. Lefever, Reining in the U.N., *Foreign Affairs*, Summar, 1993を参照。

(3) ガリの議論の特徴については、横田洋三他編『アフリカの国内紛争と予防外交』(国際書院、二〇〇一年)、第一章を参照。

(4) 一九五八年一〇月九日、ハマーショルドは国連平和維持活動の諸原則をまとめた「研究摘要」を国連総会に提出しており、この「摘要」に述べられた諸原則を想起されたい。「摘要」の内容については、香西茂『国連の平和維持活動』(有斐閣、一九九二年)、第二章を参照。同報告書の原文については、Andrew Cordier and Wilder Foote, *Public Papers of the Secretaries-General of the United Nations*, Vol.IV, Columbia University Press, 1974, pp. 230-292を参照。

(5) M. W Zacher, *Dag Hammarskjold's United Nations*, Columbia University Press, 1970, p.39.

(6) 旧ベルギー領コンゴ(旧ザイール、現コンゴ民主共和国)の歴史は、今日に至るまで、紛争および戦争の連続であった。それゆえ、コンゴ史には常に「コンゴ危機」という呼称が付きまとっている。例えば、近年の新聞報道では、一九九六年のローレン・カビラ(Laurent Kabila)の指導による反モブツ闘争に端を発し現在まで至るコンゴをめぐる紛争・戦争状況が「コンゴ危機」と呼称される。本稿ではカタンガの分離問題を軸として展開した一九六〇年から六三年までの紛争を「コンゴ危機」と

いうタームで取り扱うこととする。ちなみに日本では、コンゴ危機は「コンゴ動乱」と表記されることが多い。そして「コンゴ動乱」と表記される場合には、当該紛争は、主にコンゴ国内の部族対立ないし国内紛争として記述されることが多い。しかし近年明らかになりつつある事実は、コンゴ危機が部族対立に根ざした国内紛争などではなく、アメリカ、ソ連、ベルギーといった諸国が介入し、これら介入が決定的な影響をもった国際紛争であったということである。ベルギー人の歴史家ドウィットは、コンゴ危機の歴史は、このような観点から「新たな書き換えを求められている」と述べている。ドウィット発言、イギリス国営放送 "Correspondent"（二〇〇〇年一〇月二一日放送）。

(7) 国際連合著、国際連合広報センター監訳『ブルーヘルメット』（講談社、一九八六年）、一八頁。

(8) Indar Jit Rikhye, "Sovereignty and International Intervention in the Internal Affairs of States : Peace Keeping Operations", Ernest R. May and Angeliki E. Laiou ed., *The Dumbarton Oaks Conversatitons 1944-1994,* Harvard University Press, 1998, pp.71-72.

(9) 例えば、Carole Collins, "Fatally flawed mediation : Cordier and the Congo Crisis of 1960", *Africa Today,* Vol.39, No.3, 1992. ; Carole Collins, "The Cold War comes to Africa : Cordier and the 1960 Congo Crisis", *Journal of International Affairs,* Vol.47. No.1, 1993. ; John F. Clark, "Collective Interventions After the Cold War : Reflections on the U.N. Mission to the Congo, 1960-1964", *Journal of Political Science,* Vol.22, 1994. ; David Gibbs, "The United Nations, international peacekeeping and the question of 'impartiality' : revisiting the Congo operation of 1960.", *The journal of Modern African Studies,* Vol.38, No.3, 2000. ; Ebere Nwaubani, "Eisenhower, Nkrumah and the Congo Crisis", *Journal of Contemporary History,* Vol.36, No.4, 2001等を参照。

(10) Ludo De Witte, *The Assassination of Lumumba,* Verso, 2001, p.xxii.

(11) Brian Urquhart, "The Tragedy of Lumumba", *New York Review of Books,* October 4, 2001., Ludo De Witte, Colin Legum and Brian Urquhart, The Tragedy of Lumumba : An Excahnge, *New York Review of Books,* December 20, 2001.

(12) 本稿では、コンゴに展開された平和維持部隊を「コンゴ国連軍」ないし「国連軍」と表記する。これは我が国においてこの

呼称が一般的であることに倣っている。例えば、横田洋三編『国連による平和と安全の維持』（国際書院、二〇〇〇年）を参照。

(13) Lude De Witte, *op. cit.*, p.51.

(14) コンゴ駐在イギリス大使から外務大臣宛手紙（六〇年五月三〇日）、イギリス・公文書館（Public Record Office. 以下PROと略記）：FO 371/146634.

(15) この混乱とベルギーのコンゴ再支配過程については、Ludo De Witte, *op.cit.*, p.7.を参照。また、二〇〇一年一一月に公表されたルムンバの暗殺に関するベルギー議会上院報告書はコンゴ不安定化および反ルムンバ政策の点について基本的にドウィットの議論を支持している。Chambre des Representants de Belguique, Enquiete Parlementaire visant a determiner les circonstances exactes de l'assassinat de Patrice Lumumba et l'implication eventuelle des responsables politiques belges dans celui-ci.（二〇〇〇年一一月一六日）、以下、Belgium Reportと略記。

(16) 国連安全保障理事会決議一四三（六〇年七月一四日）、http://www.un.org/documents/scres.htm.

(17) 国連広報・事務局文書九〇〇（六〇年三月八日）、cited in Brian Urruhart, *Decolonization and World Peace*, University of Texas Press, 1989, p.56.

(18) コンゴ駐在アメリカ大使から国務省宛電報（六〇年七月九日）、*Foreign Relations of United States*（以下、*FRUS*と略記）、*1958-1960*, Vol.XIV, Africa, p.286.

(19) 国務次官ディロンからコンゴ大使館宛電報（六〇年八月二七日）、アメリカ・国立公文書館（National Archives. 以下NAと略記）RG 84, Box 6.

(20) William Durch, "The UN Operation in the Congo : 1960-1964", William J. Durch ed., *The Evolution of UN Peacekeeping*, St. Martin's Press, 1993, p.329.

(21) Brian Urquhart, *A Life in Peace and War*, Norton and Company, 1991, p.148.

(22) Conor Cruise O'Brien, *To Katanga and Back*, Universal Library, 1966, pp.56-57.

(23) アメリカ国連代表部から国務省宛電報（六〇年八月八日）、アメリカ・アイゼンハワー大統領図書館（Dwight D. Eisenhower Library. 以下、DDE Library と略記）White House Office of Staff Secretary, Box.5.

(24) 国務省文書「第一五回国連総会において合衆国が直面すると想定される選択的な主要問題」（六〇年一〇月六日）、DDE Library : Christian Herter papers, Box.19.

(25) Caroline Pruden, *Conditional Partners*, Lousiana State University Press, 1998, pp.289-290.

(26) アイゼンハワー政権の対国連政策史を包括的に議論している研究書として、Pruden, *op.cit.* を参照。

(27) 大統領報告書（六〇年八月一〇日）、DDE Library : AWF, Diary, Box.52.

(28) 国家安全保障会議記録（六〇年八月一八日）、DDE Library : AWF, NSC series, Box.13.

(29) Brian Urquhart, *op.cit.*, 1991, p.150

(30) アメリカがコンゴ問題へ関与する意志をどの程度持っていたのかという点は、別稿において検討する予定である。それは第三世界支援の手段としての国連平和維持時部隊利用の起源を探る作業となろう。

(31) Osei Boateng, Lumumba- The UN and American role, *New African*, February 2000.

(32) あまり知られていない事実だが、アメリカからの直接支援を期待していたコンゴ中央政府に対し、国連に支援要請を求めるように説いたのはアメリカであった。コンゴ大使館から国務省宛電報（六〇年七月一〇日）、*FRUS, 1958—1960*, Vol.XIV, Africa, pp.286-2.87.

(33) O'Brien, *op.cit.*, p.56.

(34) 国務省ハリマン覚書（六一年一二月一四日）、NA : Harriman Papers, Box. 516.

(35) 国連事務次長から国連事務総長宛電報（六〇年八月七日）、アリゾナ大学政治学部教授デービッド・ギブス提供。またリンデンが直接ベルギー政府の責任下にあったことについては、Belgium Report, p.8を参照。

(36) 国連安全保障理事会決議一四六（六〇年八月九日）、http://www.un.org/documents/scres.htm.

(37) 安全保障理事会決議一四三および一四五の履行に関する第二報告（六〇年八月六日）、Andrew Cordier and Wilder Foote, *Public Papers of the Secretaries-General of the United Nations,* Vol. V, Columbia University Press, 1975, pp.57-66.

(38) Pierre Wigny, Belgium and the Congo, *International Affairs,* Vol. 37, No.3, July 1961., pp.273-284.

(39) Georges Abi-Saab, *The United Nations Operation in the Congo 1960-1964,* Oxford University Press, 1978, pp.166-167

(40) Brian Urquhart, *Hammarskjold,* Alfred A.Knof, 1972., p.428.

(41) 国連事務次長から国連事務総長宛電報（六〇年八月六日）、cited in De Witte, *op. cit.,* p 13.

(42) 国連代表部から国務省宛電報（六〇年八月七日）、*FRUS, 1958-1960,* Vol.XIV, Africa, p.396.

(43) アメリカ国連代表部から国務省宛電報（六〇年八月八日）、DDE Library：White house office of staff secretary, Box.5.

(44) 国連代表部から国務省宛電報（六〇年八月七日）、*FRUS, 1958-1960,* Vol.XIV, Africa, pp.395-399.

(45) ベルギー王室の秘密書簡（六〇年七月二八日）cited in De Witte, *op.cit.,* pp.11-12.

(46) イギリス外務次官補からの覚書（六〇年七月二一日）、PRO：FO 371/14773.

(47) イギリス外務次官補からの覚書（六〇年七月二一日）、PRO：FO 371/14773.

(48) カタンガにおける経済権益として、当時イギリスは、タンガニーカ・コンセッション、ベンゲラ鉄道、ブリティッシュ・アメリカン・タバコ・カンパニー、シェルといった企業に直接資本投資を行っており、イギリス政府としても、カタンガの安定的な経済活動の継続を強く望んでいた。また政治面でも、イギリス政府は、コンゴの政治的混乱が、他のイギリス領植民地に波及することにも強い懸念を抱いていた。イギリスは、コンゴに隣接するウガンダ、タンガニーカ、ケニヤ、ローデシア・ニ

ヤサランドといった植民地を領有していたため、ルムンバのような急進的民族主義者の影響がそれら植民地で現れることを極度に警戒した。コンゴ駐在イギリス大使から外務大臣宛手紙（六〇年六月二二日）、PRO：FO 371/146635.

(49) コンゴに対するアメリカの政策（六〇年八月一日）、DDE Library：OSANSA, NSC briefing, Box.1. なおカタンガ産のウラニウムは、第二次世界大戦中、広島・長崎に投下された原爆開発に利用された。

(50) 国家安全保障会議記録（六〇年七月二五日）、国務省文書「コンゴ危機に関する分析的年表」（六一年一月二五日）アメリカ・ジョン・F・ケネディ大統領図書館（以下、JFK Library と略記）：NSC Files, Box. 27., p.20.

(51) 国家安全保障会議記録（六〇年七月一五日）、DDE Library, AWF, NSC series, Box. 12.

(52) 大統領との会合記録（六〇年七月一九日）、*FRUS：1958-1960*, Vol.XIV, Africa, p.329.

(53) 国連安保理公式議事録（六〇年八月八日）、*Security Council Official Records*, 885 th meeting, p.8.

(54) Catherine Hoskyns, *The Congo since Independence：January 1960-December 1961*., Oxford University Press, 1965, pp.151-155.

(55) 会談記録（六〇年八月五日）、*FRUS, 1958-1960*, Vol.XIV, Africa, p.387.

(56) Sean Kelly, *America's Tyrant：The CIA and Mobutu of Zaire*, The American University Press, 1993, p.39.

(57) 国務長官電話記録（六〇年八月八日）、DDE Library：Herter Papers, Telephone Calls Series, Box 13.

(58) Bleigum report, p.8.

(59) 国家安全保障会議記録（六〇年八月二五日）、DDE Library：AWF, NSC series, Box.13.

(60) 国家安全保障会議記録（六〇年九月七日）、DDE Library：AWF, NSC series, Box.13.

(61) 国務省文書「コンゴ危機に関する分析的年表」（六一年一月二五日）、JFK Library：NSC Files, Box. 27., p.29.

(62) Belgium report, pp.8-9.

(63) 国家安全保障会議記録（六〇年八月一八日）、DDE Library：AWF, NSC series, Box.13.

(64) 中央情報局報告書「コンゴ危機の影響について」（六〇年八月二二日）、NA：RG 59, Box.8.

(65) United States Senate, *Alleged Assassination Plots InVolving Foreign Leaders,* U.S. Government Printing Office（以下、U.S.Senate と略記°）1975, p.16.

(66) 国連安全保障理事会決議一四五（六〇年七月二二日）、http：//www.un.org/documents/scres.htm

(67) コーディアーからシュワルムへの手紙（六〇年八月二八日）、cited in Collins, *op. cit.,* 1992, p. 15.

(68) アメリカ国連代表部から国務省宛電報（六〇年八月二八日）、NA：RG 84, Box 6.

(69) コーディアーからシュワルムへの手紙（六〇年九月一五日）、cited in Collins, *op. cit.,* 1992, p. 14.

(70) イギリス国連大使から外務省宛電報（六〇年八月三一日）、PRO：FO 371/1467791.

(71) 国連代表部から国務省宛電報（六〇年八月一六日）、cited in Madeleine G. Kalb, *The Congo Cables：The Cold War in Africa-From Eisenhower to Kennedy,* Macmillan, 1982, , p.51.

(72) 大統領報告書（六〇年八月三〇日）、DDE Library：AWF, Diary, Box. 52.

(73) US Senate, *op.cit,* p.29.

(74) アメリカ駐在ベルギー大使との会談記録（六〇年七月一五日）、*FRUS, 1958-1960,* Vol.XIV, Africa, p.316.

(75) 外部勢力の影響を一切考慮せず、カサブブおよび後に検討するモブツのクーデターを国内政治対立から描き出そうとする試みは、依然として見うけられる。例えば、Peter B.Heller, *The United Nations under Dag Hammarskjold,* The Scarecrow Press, 2001, pp.126-127.

(76) 国家安全保障会議記録（六〇年八月一八日）、DDE Library：AWF, NSC series, Box.13.

(77) Belgium report, p.8.

(78) US Senate, *op.cit.,* p.50.

(79) Andrew Tully, *C.I.A- The Inside Story,* William Morrow, 1962, p.221.　タリーの「暴露」は、本書の出版が六二年であったことから考えても、比較的早い時期になされている。しかし、このような「陰謀」の存在は、アメリカの公式発表からは「抹殺」され続け、コンゴ危機研究に反映されてこなかった。アメリカ政府文書の機密性が国際政治学に与える影響については、David Gibbs, "Secrecy and International Relations," *Journal of Peace Research,* 32, no. 2, 1995を参照。

(80) シュワルムへの手紙（六〇年八月一五日）、cited in Collins, *op. cit.,* 1992, p.15

(81) コンゴ駐在イギリス大使館から外務省宛電報（六〇年九月五日）、PRO：FO 371/146643.

(82) De Witte, *op.cit.,* pp.19-.20.

(83) コンゴ駐在アメリカ大使とのスタッフインタビュー（六五年五月一四日）、デービッド・ギブス提供。

(84) De Witte, *op.cit.,* p.21.

(85) 大統領報告書（六〇年九月一三日）、DDE Library：AWF, Diary, Box.52.

(86) Rajwshwar Dayal, *Mission for Hammarskjold,* Princeton University Press, 1976, pp.33-35, Kalb, *op.cit.,* pp.74-75, O'Brien, *op.cit,* pp.93-94.

(87) The Tragedy of Lumumba：An Exchange, *The New York Review of Books,* December 20, 2001, p.104.

(88) 統合参謀本部から国防長官宛覚え書き（六〇年八月一八日）、*FRUS, 1958-1960,* Vol.XIV, Africa, p.426.

(89) アメリカ国連代表部から国務省宛電報（六〇年八月二六日）、*FRUS, 1958-1960,* vol.XIV, Africa, p.444.コンゴ大使館から国務省宛電報（六〇年八月二八日）、NA：RG 84, Box 6.

(90) 国家安全保障会議記録（六〇年九月七日）、DDE Library, AWF：NSC series, Box.13.

(91) Cordier and Foot, *op.cit.,* 1975, p.164.

(92) 国務省文書「コンゴ危機に関する分析的年表」（六一年一月二五日）、JFK Library：NSC Files, Box 27.

(93) 国連代表部から国務省宛電報（六〇年九月七日）、*FRUS, 1958-1960*, Vol.XIV, Africa, p.465.
(94) 国連事務次長とルムンバとの対談記録（六〇年八月一二日）、United Nations archives : DAG 1/5.1.1-1.
(95) イギリス国連大使から外務省宛電報（六〇年九月七日）、PRO : FO.371/146643.
(96) 国務省文書「コンゴ危機に関する分析的年表」（六一年一月二五日）、JFK Library : NSC Files, Box 27.
(97) 国家安全保障会議記録（六〇年九月七日）、DDE Library : AWF, NSC series, Box.13.
(98) Belgium report, p.8.
(99) 大統領報告書（六〇年九月一三日）、DDE Library : AWF, Diary, Box.52.
(100) コーディアーからシュワルムへの手紙（六〇年九月一五日）、cited in Collins, *op. cit.*, 1993, p.262.
(101) Hoskyns, *op.cit.*, p.213.
(102) Hoskyns, *op.cit.*, p.212. コンゴ国軍という名称を考案したのもケッタニであり、彼とモブツは極めて親しい間柄であった。
(103) この二つのクーデターにはＣＩＡを介した連続性が存在した。ＣＩＡ長官ダレスは、カサブブとモブツの関係を「チーム」と呼んでいる。国家安全保障会議記録（六〇年九月一五日）、DDE Library : AWF, NSC series, Box.13.
(104) Michela Wrong, *In the Footsteps of Mr.Kurtz*, Haper Collins, 2001, pp.66-67.
(105) Dayal, *op.cit.*, p.66.
(106) Crawford Young, *Politics in the Congo*, Princeton University Press, 1965, p.447.
(107) Dayal, *op.cit.*, p.34.
(108) 国家安全保障会議記録（六〇年一月一四日）、DDE Library : AWF, NSC series, Box.13.
(109) これらの出来事については、Gibbs, *op. cit.*, 2000および Dayal, *op.cit.* を参照。